アンドラゴジー的視点を導入した学校の教育活動に関する一考察
―人間関係と総合的な学習の時間を中心として―

清水 英男

はじめに

現在，我が国では，21世紀を共に生きる人々が物心ともに豊かで充実した人生を謳歌できるよう，社会のあらゆる分野で，ハード・ソフト両面における急激な転換や改革が行われている。特に，“人づくり”に深くかかわる学校の教育改革への関心と成果への期待は，ますます高まっている。

学校は，このような変化・変革の渦中にあって，教育・学習における不易と流行の調和を図りながら，グローバルな視点や生涯学習の観点などに立って制度や学習内容・方法等の改革や改善をすすめている。私は，このような学校教育の改善・改革のバックボーンには，従来成人に対する学習理論・教育技術であったアンドラゴジー(andragogy)的視点が導入されていると考えている。

一方，我が国では，世界各国に先駆け，生涯学習社会を構築する機運が醸成され，都道府県や市区町村での特色ある取り組みが行われている。その中で，学校には，児童・生徒の生涯学習の基礎を培うことと地域の生涯学習の中核的機関として機能することが求められている。つまり，生涯学習という観点に立った開かれた学校経営と特色に満ちた学校教育を推進するということである。例えば，学校教育としては児童・生徒が生涯にわたる教育・学習活動を自らの意思で行うための基礎的・基本的な資質・能力を育成することなどである。また，学校は，住民にグランドや特別教室などの施設・設備を開放することをはじめ，教師が指導者となるコーラスクラブや開放講座など教育の機能を開放することなどである。

我が国の小・中・高等学校や盲・ろう・養護学校など初等中等教育諸学校(以下「学校」という。)は，教育基本法の定めに基づく教育の目的や各学校の裁量による教育目標などの達成を図るために，地域の特性を生かした多種・多様な特色ある教育活動を展開している。そして，人間として“知・徳・体の調和のとれた児童・生徒”の育成を目指しているのである。

これらのことを踏まえ，本稿では，伝統的に子どもの教育を中心とした教育学(pedagogy)を根底に据えながら，その子どもという枠を越える学習理論・教育技術を導入する視点としてアンドラゴジーの必要性を明らかにする。そして，高等学校におけるアンドラゴジー的視点を導入した“教師と生徒の好ましい人間関係づくり”のあり方と学校における教育・学習活動のあるべき姿について，“総合的な学習の時間”を事例として考察することを目的とした。

1　生涯学習社会における学校と学校教育

昨今，我が国の人々は，社会構造や社会環境が急激に変化・変革する渦中にあっても，安易に時代の波に流されることなく，自らの判断で主体的に対処し，自分らしい人生を享受することを求めている。

(1)生涯学習の“まち”づくりと学校

地方公共団体は，住民と協働(collaboration)して，一人ひとりの豊かな人生や地域の活性化を目指している。そのため，教育・文化・スポーツ等の学習を尊ぶ気風を醸成し，住民が生涯にわたる学習活動を盛んに行い，その学習の成果を生かした人生づくりや“まち”づくりを住民主導で行う，いわゆる，「生涯学習による“まち”づくり」を促進している。そのインフラ(Infrastructure)である学校や公民館，生涯学習センターや女性教育会館，図書館や博物館など生涯学習関連施設を設置し弾力的に運営するなど，生涯学習の基盤を整備している。つまり，“生涯のいつでもどこでもだれでも必要に応じて学ぶことができ，その学習の過程や成果が尊ばれる社会”という「生涯学習社会」づくりを推進しているのである。

(2)生涯学習社会における学校教育

このような状況にあって，21世紀の主体者である児

童・生徒が生涯にわたって心豊かで充実した人生を送るためには，人生の各時期において，必要に応じて学習の手段や内容・方法を自ら選択し学ぶことができ，その学習の成果を適切に生かすことが必要となる。そのため，生涯学習のリテラシー(literacy)を学ぶ学校教育においては，児童・生徒自らが学習に対する興味・関心を高めながら，旺盛な学習意欲を持ち続けることがきわめて大切といえよう。また，“学び方”を体得することや自ら学び続けることができる基礎的・基本的な学習内容を確実なものとするなど，生涯学習に関する基礎・基本的な資質・能力を含めた〔生きる力〕を身につけることが求められている。

(3)［生きる力］と「学習の4本の柱」

現行の学習指導要領は，完全学校週5日制のもとで，各学校がゆとりの中で特色ある教育を展開し，児童・生徒が［生きる力］を培うことを基本的なねらいとしている。この［生きる力］は，教育課程審議会答申(平成10年7月)の中で，中央教育審議会第一次答申(平成8年7月)を引用し，次のようにまとめている。

「『いかに社会が変化しようと，自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力』,『自らを律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心や感動する心など，豊かな人間性』，そして,『たくましく生きるための健康や体力』などを重要な要素として挙げている。」

この［生きる力］は，ユネスコの「21世紀教育国際委員会報告書(『Learning：The Treasure Within』1996)が提言した「学習の4本柱」と軌を一にしているといえる。

その4本の柱は，以下のとおりである。

①知ることを学ぶ(Learning to know)

②なすことを学ぶ(Learning to do)

③共に生きることを学ぶ(Learning to live together,Learning to live with others)

④人間として生きることを学ぶ(Learning to be)

出典【天城勲　監訳『学習：秘められた宝――ユネスコ『21世紀教育国際委員会』報告書」(1996，㈱ぎょうせい)p.218】

これらのことは，21世紀に生きる子どもも大人も，家庭と学校と地域の教育機能も，また，国境を越えても共有し実践できる極めて価値高い教育・学習観といえよう。

2　学校教育にアンドラゴジー的視点を導入する意義

アンドラゴジーとは，子どもを中心とした教育学であり教授法でもあるペタゴジーと対比される成人の学習を援助する教育理論・教育技術といえる。

現在，この主として成人を対象にした教育学が，学校の教育・学習活動に導入されている。

(1) 学習者の特性と学習プログラムの計画要素

米国の教育学者マルカム・ノールズ(Malcolm S.Knowles)氏は,「アンドラゴジーは，伝統的なペタゴジーがもっていたものとは異なる学習者の特性に関する重要な考えから成り立っている。」とし，以下のような4項目を学習者の特性として挙げている。(堀薫夫　三輪建二　監訳「成人教育の現代的実践」p.40)

①自己概念は，依存的なパーソナリティのものから，自己決定的な人間のものになっていく。

②人は経験をますます蓄積するようになるが，これが学習へのきわめて豊かな資源になっていく。

③学習へのレディネス(準備状態)は，ますます社会的役割の発達課題に向けられていく。

④時間的見通しは，知識の後になってからの応用というものから応用の即時性へと変化していく。それゆえ，学習への方向付けは，教科中心的なものから課題達成(performance)中心的なものへと変化していく。

また，池田秀男氏は，アンドラゴジー・モデルとしての学習プログラムの主要な計画要素として，次のような7段階の循環的なプロセスから構成されているとしている。(日本生涯教育学会編「生涯学習辞典」1990，p.29)

①学習活動への主体的な参加を誘発するための「雰囲気」(climate)づくりの段階。

②学習者自身が学習計画の企画立案過程に参画し，指導者と対等な責任を共有できるような学習プログラムの「相互的計画化」(mutual planning)の構造やメカニズムを確立する段階。

③学習者自身が自己の学習要求を「自己診断」(self-diagnosis)し，学習の必要性と達成への内発的動機づけを自覚的に組織化する段階。

④学習者自身が自らの学習活動を計画実施し，その成果を自己評価できるような形で「学習目標」を公式化する段階。

⑤学習目標を達成するために学習者自身が学習内容と最適の学習形態を選択し，これによって「学習経験のパターン」をデザインする段階。

⑥以上の段階を通して準備された学習設計を具体的な学習活動に翻訳，移行し，実施する段階。

⑦学習の結果を学習者自身が評価し，学習目標と学習結果

との間のギャップを再診断する段階。

(2) 学校教育へアンドラゴジー的視点を導入する意義

昨今の学校における教育改革の理論をはじめ，現行の学習指導要領や特色ある先導的な教育活動の中には，ペタゴジーを基本としながらアンドラゴジー的視点を導入して創設されている分野や教育・学習内容・方法等が数多く見受けられる。例えば，興味・関心，意欲・態度などを含んだ評価の観点や総合的な学習の時間の創設などである。

成人を対象としているアンドラゴジーの視点を学校の教育・学習活動に導入する意義は，アンドラゴジーの“学習者一人ひとりを尊重する”という理念が，学習・教育活動全体をとおして貫かれているからといえよう。つまり，このことは，学校教育においても，児童・生徒一人ひとりを尊重した教育・学習活動が求められているという証左でもある。

3 学校教育を効果的にすすめるアンドラゴジー

学校が創意・工夫に富んだ特色ある教育活動を推進するためのコア(core)は，教科，道徳(高等学校はすべての教科・科目で実施)，特別活動，総合的な学習の時間によって編成される教育課程である。その教育課程は，各学校が児童・生徒の発達課題や教育の適時性をはじめ，児童・生徒や地域の実態，教育にかかわる環境や時代の要請などを踏まえ，学校教育法や学習指導要領等に則り，組織的・計画的・体系的・総合的・継続的な観点に基づき編成され実行されている。

マルカム・ノールズ氏は，前述の「成人教育の現代的実践(p.38)」の中で，アンドラゴジーが青少年教育のある状況下では優れた学習を生み出したことから，アンドラゴジーとペタゴジーの関連について「二分法というよりはむしろ一つのスペクトルの両端としてみたほうが，おそらくより現実的であろう。」という考えを示している。

つまり，「ペタゴジーは子どもの教育理論と教育技術であり，大人はアンドラゴジーの理論と技術である。」という固定的な考え方ではなく，これら両者を，年齢とは関係なく，教育・学習の内容や方法などによって効果的に活用するということである。

(1) アンドラゴジー的視点を導入した総合的な学習の時間

現在実施されている総合的な学習の時間は，平成10年12月14日の学校教育法施行規則の改正によって，教育課程の編成に加えられた。その総合的な学習の時間は，各学校が地域や生徒の実態等に応じて，横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意・工夫を生かした教育活動を行う時間として創設されたのである。

このような総合的な学習の時間は，戦後の我が国の教育課程における米国のバージニア・プラン(1930年代)を参考にした「総合社会科」やコア・カリキュラム連盟が提唱した社会科学的な単元学習の系列を中心(コア)課程とし関連する基礎的な知識・技能の学習を周辺課程として位置づける「総合カリキュラム」をルーツとしている。

我が国の総合的な学習の時間と米国のバージニア・プランとの整合性は，スコープ(scope：学習内容の範囲や領域など)とシーケンス(sequence：学習内容の系列や配列など)とのかかわりが考えられる。例えば，総合的な学習の時間のスコープは，事前に特定されずに生徒の興味・関心と教師の助言に基づいて学習テーマなどが決定される。シーケンスも生徒が教師のアドバイスを得て計画し展開するのである。この両者の共通点は，教育・学習活動の主体は生徒であり，その支援を行うのが教師ということである。しかし，このバージニア・プランにおけるコア・カリキュラムも，「社会的な問題を中心とする学習」をコアとしたことからもわかるように，アンドラゴジー的視点が導入されているといえよう。

現行の学習指導要領総則第4款では，総合的な学習の時間の狙いを，「自ら課題を見つけ，自ら学び，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。」ことと，「学び方やものの考え方を身に付け，問題の解決や探究活動に主体的，創造的に取り組む態度を育て，自己の在り方生き方を考えることができるようにする。」としている。また，各学校は，名称や学習内容をはじめ，1年を見通した弾力的な授業時数の配当などを決定できる。さらに，グループ学習や個人研究などの多様な学習形態を選択できるのである。そのほか，郷土史家や伝統芸能など地域の教育資源，自然体験や奉仕体験などの体験的な学習の積極的な導入をも示している。

評価については，教育課程審議会答申(平成10年7月29日)によると，数値的な評価ではなく，学習活動の過程をはじめ，報告書や発表などのよい点，学習への意欲・態度や進歩の状況を踏まえることとされている。また，平成12年12月の教育課程審議会答申では，ポートフォリオ(portfolio)による評価が紹介され，学習の過程での評価の重要性が指摘されている。現在，このポートフォリオ評価が盛んに用いられている。

現時点では，このようなアンドラゴジー的視点を導入した総合的な学習の時間が，小学校3年生から高校3年生まで履修必修として行われている。このようなアンドラゴジ

ー的視点を導入した教育・学習活動は，そのプロセスや成果などを通して，学ぶ喜びや学習による成就感を体得するとともに，人間の尊厳や人間尊重の精神が培われ，かけがいのない人生を自分らしく生きる基本的な資質と能力を身につけることが期待できるのである。

特に，地域を舞台にした学校教育と社会教育が一体となって取り組む，いわゆる“学社融合”型総合的な学習の時間では，そのことが顕著になっている。例えば，地域の指導者や自然・文化・地場産業など多種多様な教育資源を活用し，児童・生徒の興味・関心に基づいた学習テーマが設定できるのである。また，地域の指導者の適切な助言や心と心の交流などによって，好ましい人間関係がつくられるとともに，実際の生活に根ざした学習課題の発見や課題探求型の体験的な学習活動が容易に展開できるからでもある。

(2) 教育課程を効果的にすすめる人間関係づくり

学校の教育・学習活動を効果的に進めるためには，これらの活動に直接・間接的にかかわる教師と児童・生徒と保護者をはじめ，教師同士や児童・生徒同士の好ましい人間関係が醸成されていることが必須の条件といえよう。また，このような好ましい人間関係は，学校におけるすべての教育・学習活動を展開する過程や結果として形成されなければならない。さらに，好ましい人間関係づくりは，教師や児童・生徒が人間としての生き方や在り方について“気づき，学び，振り返る”ことにも結びつく価値高いことといえる。これらのことは，アンドラゴジー的視点を導入することによってより定着されよう。

(3) アンドラゴジー的視点を導入した学校教育の成果

総合的な学習の時間などアンドラゴジー的視点を導入した学校における教育・学習活動では，以下のようなことが実践されることが期待される。そして，このようなことが恒常的に実践され続けると，学校は，人間の尊厳が守られ人間尊重の精神が息づいた豊かな人間関係の中で，教育・学習活動が効果的に展開され，調和のとれた人間形成がすすめられよう。

①教師と児童・生徒の好ましい人間関係づくりが日常的に行われている。

②児童・生徒は，かけがいのない人間として尊重されていることを実感している。

③児童・生徒は自らの生活経験を生かし，また，教師によって生かされていると実感できる教育・学習活動が展開されている。

④教育・学習活動は，児童・生徒の生活経験や体験等に基づいた　課題意識を動機づけとしている。

⑤児童・生徒自身が学習意欲を高め，また，教師から高められている。

⑥児童・生徒主導型の教育・学習活動が実践されている。

⑦成功・失敗体験を積み重ねることができる学習方法などが行われている。

⑧確かな知識や技術等を蓄積することなどをとおして“学び方”を学んだり，“学ぶ楽しさ”を体得している。

⑨多くの授業の中で，人間としての生き方や在り方を学習できる。

⑩教育・学習活動の中で，人間として成長・発達していると児童・生徒自らが実感できる。

さらに，マネージメントサイクル〔計画(Plan)，実践(Do)，評価(See)〕に基づいた教科・科目や道徳，特別活動，クラスなどの経営に意を用いることも必要である。

4　アンドラゴジー的視点に立った児童・生徒理解

教師は，児童・生徒一人ひとりを人間として尊重し好ましい人間関係づくりに努めながら，教育課程に則り，個々の児童・生徒の学力を向上させることが求められている。

これらのことをアンドラゴジー的視点から実践するためには，先ずもって“好ましい人間関係づくり”が優先される。そのためには，次のようなことが教師の基本的な児童・生徒の理解やかかわり方の基本といえよう。

(1) 児童・生徒理解の深化

児童から高校生までの期間（以下「児童・生徒期」という。）は，人間形成上最も大切な時期でもある。この時期の主な発達上の課題は，自己理解や他者理解を深めるなどして好ましい人間関係を培い，自己を確立し社会規範を守る態度を養うことといえる。また，これらのことを通して好ましい人格を形成することなどである。特に，生徒期は，自己同一性など発達上の課題を達成する過程で，依存と自立の関係や理想と現実のギャップなどによる葛藤が生じるなど精神的に不安定な状況にある，いわゆる“悩み多き時期”でもある。

つまり，今日の中・高校生は，急激な社会の変化による“流動する社会環境”と“悩み多き時期”とを共有しているというよう。そして，一人ひとりが，かけがえのない個性を磨きながら，社会的な人間としての様々な課題を抱え生きているのである。

そこで，教師は，児童・生徒一人ひとりの個性的な生き方や生活経験を踏まえて，きめ細かく理解する資質・能力

を高めることが必要となる。また,「人間は，自己の向上を目指して常に変化している。」ことに着目し，固定的な児童・生徒観をもたず,「個々人は飛躍の可能性を秘めた素晴らしい人間である。」というアンドラゴジー的視点をもって児童・生徒理解を深化することが肝要といえよう。

(2) 人間としての無条件の尊重

好ましい人間関係は，相互に信頼し尊敬する関係にあることが肝要である。そこで，アンドラゴジー的視点にたった教師は，児童・生徒を人間として無条件に尊重する心をもち，今そこにいる児童・生徒をあるがままに理解することが大切である。つまり，教師は，予断や偏見をもたず，その生徒の立場に立って，悩みや不安，意識や行動などを共感的に理解しようとする態度が必要ということである。

このような教師の態度が，児童・生徒に“心の鎧”を取り除く勇気をもたせ，教師や自らに対しての信頼への期待を抱かせる。しかし，共感的理解は，児童・生徒への無条件の同調を意味するものではない。児童・生徒の考え方と立場を異にする場合は，児童・生徒の考え方を充分に理解したことを伝えたうえで，教師自らの考えを話すことが必要である。

このような教師のアンドラゴジー的視点を踏まえた児童・生徒観にたった実践活動は，児童・生徒に教師への尊敬の念や大人への信頼感を培うことができよう。つまり，児童・生徒は，教師に尊重され，自らの考えを理解されたという実感をもつことができる。児童・生徒は，このような状況での教師のアドバイスなら素直に受け入れることができる。また，教師に対する信頼感を一層高めることに結びつくといえよう。

(3) 非言語コミュニケーションの重視

好ましい人間関係づくりには，互いに意思の疎通を図ることが必要である。その手段として，いわゆるコミュニケーションは欠かせないものである。

このコミュニケーションには，対話や文章等言語を媒介にする方法と動作や態度等非言語による方法に大別されるといわれている。しかし，実際のコミュニケーションの場では，これらの方法が複雑に絡み合って行われている。

学校における一般的な教育・学習活動では，言語によるコミュニケーションを重視することは当然としても，教師はアンドラゴジー的視点にたった非言語によるコミュニケーションの場面を大切にする必要がある。例えば，沈黙は，会話が一時途絶えただけであり，コミュニケーションがなくなったことではない。むしろ，顔の表情や手足の動作など非言語によるコミュニケーションが雄弁に心情を物語っていることが多い。この場合は，生徒への信頼を込めた温かい気持ちをもつなどして，余裕をもって対応することも必要である。

5 アンドラゴジー的視点に立った教師の指導・助言

教師が行う教育活動には，指導，助言という手法が一般的に用いられている。これら両者は，厳密には区分されていないが，幾分ニュアンスが違っており，場面場面に応じて用いられている。

指導と助言をアンドラゴジー的視点からみた場合，その効果的な場面と活用については，次のようなことがいえよう。

(1) 教科・道徳における指導の在り方

指導は，児童・生徒がわからないことを“教える”という場面で効果を発揮する。特に，教科・科目等の一斉授業など，いわゆる集団を相手にした学習活動では有効である。

アンドラゴジー的視点にたった指導上の主な留意事項については，以下のことが考えられる。

①個々の児童・生徒から尊敬や畏敬の念をもたれるほどに学習内容や教育方法等に熟知している。
②それらを児童・生徒の目線で考え，児童・生徒の興味・関心や能力に応じたものに改善・工夫している。
③導入を児童・生徒の生活体験等身近な事例から導きだしている。
④常に児童・生徒の反応(理解の程度)を確かめ，適切なフィードバックを行っている。
⑤場合によっては，指導案を変更するなど毎回の学習内容に柔軟性をもたせている。
⑥褒めることを忘れずに実行している。
⑦情熱をもって対処している。

これらのことを前提として，効果的な指導の在り方を模索する場合,「やってみて言って聞かせて，させてみる。褒めてやらねば人は動かず。」という我が国の伝統的な体験学習ともいえる指導法を吟味することも意味があると思われる。

(2) 相談場面における助言のあり方

助言とは，児童・生徒個人の悩みや不安など内面的な問題の解決をはじめ，問題解決型学習での疑問の解消や問題提起などを援助するという，いわゆる，個別対応型の相

談・学習活動の場面で効果を発揮する。したがって，助言は教育相談で活用されている。しかし，教師個人の日常的な教育・学習活動においても，好ましい人間関係の形成や児童・生徒の自主的・自立的な精神を涵養するうえで極めて有効である。アンドラゴジー的視点にたった助言上の主な留意事項については，以下のことが考えられる。

①児童・生徒をかけがいのない人間として無条件に尊重する。

②児童・生徒は必ず(いつかは)自分自身で問題を解決できる人間であると信じ続ける。

③児童・生徒の考えを理解したり整理することに心がけ，それを投げ返して児童・生徒自身が自らの意思の確認を援助する。

④教師は，児童・生徒自らが問題を解決するための援助者としての役割を果たす。

⑤粘り強く，あきらめずに見守る。

これらのことを踏まえて，実効的な助言の仕方を考える場合,「手をはなして，目をはさない。」という我が国の格言も参考に値すると思われる。

このような人間尊重の精神に立脚した助言は，児童・生徒が本来の自分に戻る(自ら学び考え判断して実行し評価する)ことを効果的に援助できるとともに，その過程で，児童・生徒と教師相互の信頼関係が深まり，好ましい人間関係が醸成されるといえる。

お わ り に

児童・生徒期は，身体も心も急激な成長・発達を遂げつつある時期でもある。そして，児童・生徒は，その時点時点で，学習や生活などについて適切な指導・助言を，信頼できる人間から得たいと願っている。

教師は，自らの人生経験や学問などによって得た知恵や知識・技術をもった社会人であり，教科や特別活動など学校教育に関する専門家でもある。このような教師が児童・生徒のおかれている状況を的確に把握し，児童・生徒をかけがえのない人間として尊重し，学習活動を効果的に指導・助言し，悩みや不安などの相談に積極的に応じることは極めて大切なことである。このような教師がいる学校は，児童・生徒にとって“居がい”のある教育・学習の場となり，教師は尊敬できる人生の師となるであろう。

現在，学校(教師)に求められている大切なことは，児童・生徒の学習活動を充実するとともに，心身の健康を増進し，健全なる生活習慣を身につけさせることなどである。このような基本的な人間形成の過程の中で，教師と児童・生徒相互の信頼関係に基づいた“心と心の交流”を一層深めることが期待されるのである。そのため，教師は，“人間が好きだ”という心情を培い，人間関係の向上を図るとともに，専門教科等の力量を高めるなど，教育者としての自己啓発に努めることが必要である。

学校教育にアンドラゴジー的視点を導入することは，知識・技術の社会化や人間尊重の精神をすべての教育・学習活動の中に脈々と息づかせることであるといえよう。

今回の考察では，その必要性のすべてを明らかにするには不十分であり，今後，さらに，教科活動や道徳，特別活動などの実践に役立つ具体的・実証的な研究を重ねていきたい。

参考文献

1．日本生涯教育学会年報第17号(清水英男著「地域における生涯学習推進と学社融合」
2．伊藤俊夫他編「新社会教育事典」(池田秀男著「アンドラゴジーの視座」第一法規)
3．日本生涯教育学会編「生涯学習辞典」(池田秀男著「アンドラゴジー」東京書籍)
4．堀熟夫　三輪建二監訳　Malcolm S.Knowles 著「成人教育の現代的実践」(鳳書房　2002年)
5．田中雅文他訳　Edwin Hamilton著「成人教育は社会を変える」(玉川大学出版部　2003年)
6．倉沢剛著「米国カリキュラム研究史」(風間書房　昭和60年)
7．教育課程審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校，盲学校，聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」(平成10年)
8．文部省「高等学校学習指導要領解説　総則編」(東京書籍，平成11年)
9．山本恒夫他編「新訂版『総合的な学習の時間』のための学社連携・融合ハンドブック」(清水英男著「『総合的な学習』を地域で展開する際の課題」文憲堂　2003年)
10．天城勲監訳「学習：秘められた宝――ユネスコ『21世紀教育国際委員会』報告書」(ぎょうせい　1996年)